



## 『源氏物語』宇治十帖の「彦星の光」

## ●『源氏物語』総角巻



本資料の画像はすべて和泉市久保惣記念美術館蔵『源氏物語手鑑』（土佐光吉・安土桃山時代成立）による。  
<https://www.ikm-art.jp/digitalmuseum/num/001/0010148000.html>

## ●古典本文

十月一日ごろ、網代もをかしきほどならむとそそのかしきこえたまひて、紅葉御覧ずべく申しさだめたまふ。（略）

舟にて上り下り、おもしろく遊びたまふも聞こゆ。ほのぼのありさま見ゆるを、そなたに立ち出でて、若き人々見たてまつる。正身の御ありさまはそれと見わかねども、紅葉を葺きたる舟の飾りの錦と見ゆるに、声々吹き出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまでおぼゆ。世人のなびきかしづきたてまつるさま、かく忍びたまへる道にも、いとことにいつくしきを見たまふにも、げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめとおぼえたり。

## ●現代語訳

十月はじめごろ、網代もおもしろい時分だろうと、中納言（薫）は兵部卿宮（匂宮）にお勧め申されて、宇治の紅葉のご見物を進言なさる。（略）

舟で上り下りしておもしろく管絃の遊びをなさるのも聞えてくる。その様子をはるかかなたに見えるのを、若い女房たちはそちらの端近に出てきて拝見している。宮ご本人のお姿はそれと見分けられないけれど、紅葉を屋根に葺いた舟飾りが錦のように見えるところへ、声々に吹きたてている楽の音が風によって聞えてくるのは、仰々しいまでにぎやかに響いてくる。世間の人々がなびき従ってたいせつにお仕え申している有様が、こうしたお微行の際にもまったく格別に豪勢なのをごらんになるにつけても、女房たちは、いかにも年に一度の七夕の逢瀬であっても、こうした彦星の光をこそ待っていたいもの、と思わずにはいられない。

宇治を舞台とする「宇治十帖」では、中納言（薫）と大君、宮（匂兵部卿宮）と中君との恋愛が語られます。

ご紹介した本文「げに七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめ」からは、

宇治川へまれにしか訪れない匂宮を「彦星」に、「宇治川」を「天の川」にそれぞれたとえていることが分かります。

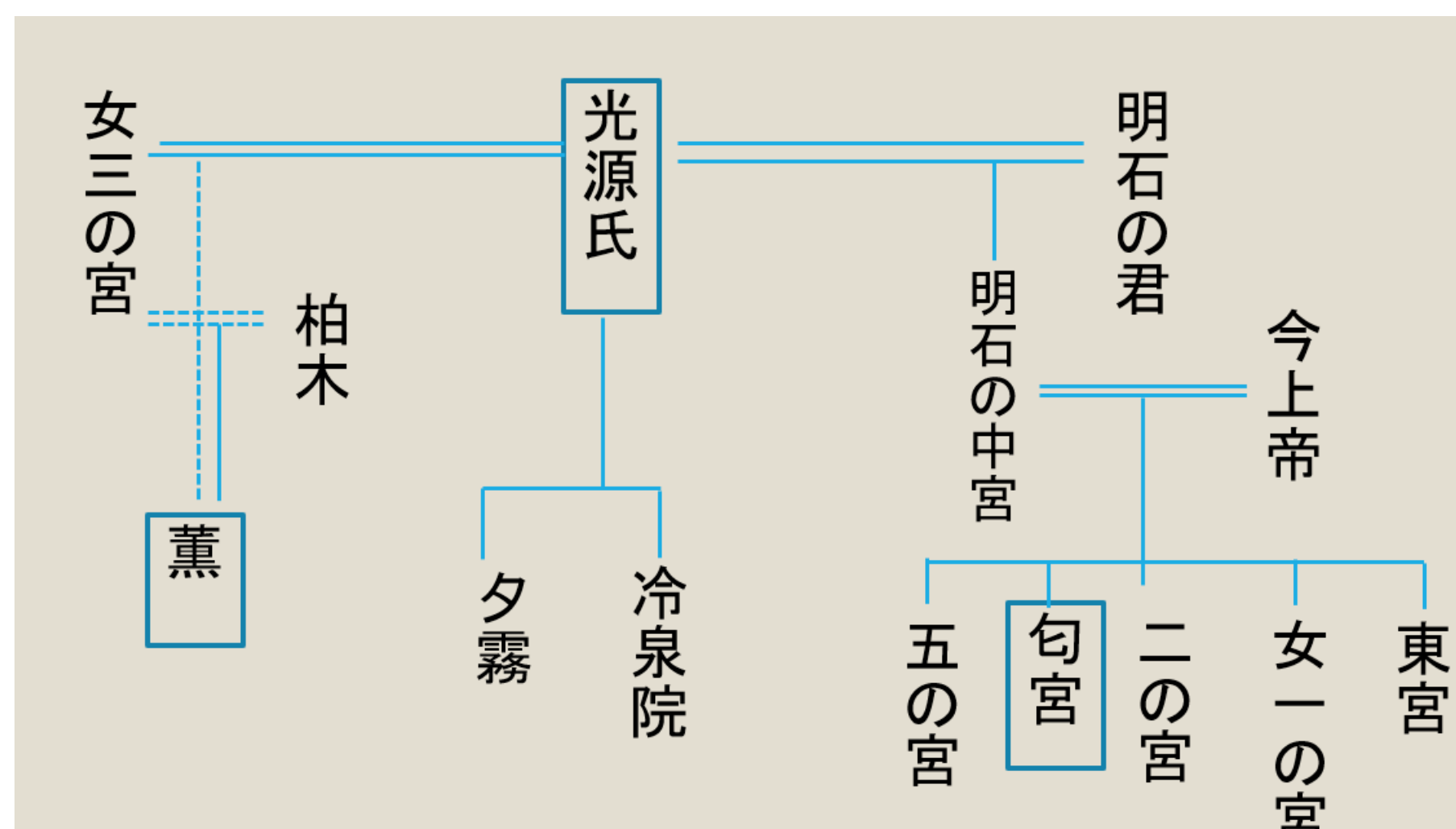
なお、七夕は紅葉とも関連します。

『古今和歌集』（巻四・秋上・175・読人しらず）  
 「天の川 紅葉を橋に わたせばや  
 七夕つめの 秋をしもまつ」

「天の川に紅葉した葉が散ったのを水に浮かべて、橋のように渡すからなのでしょう。七夕姫は恋人の訪れる季節として、秋を特に待っていますよ」という意味。

紅葉した葉（あるいは枝）を橋にした、というロマンティックな和歌です。

## ●「宇治十帖」人間関係図



## ●「宇治」へ行ってみよう！（京阪宇治線・宇治駅下車）

